

読書推進運動



公益社団法人
読書推進運動協議会

〒162-0828
東京都新宿区袋町6
日本出版クラブ会館内
TEL 03(3260)3071
FAX 03(5229)1560

発行人 宮本 久
編集人 片岡 伸子

No. 600

★2018「若い人に贈る読書のすすめ」書目決定(2頁)

★第50回「全国優良読書グループ表彰」決定(3頁)

定価 60円

会員の購読料は
会費の中に含まれる



「若い人に贈る読書のすすめ」によせて 図書館はみんなの居場所

元 日本図書館協会出版委員
日本図書館協会 会員

まつしま
しげる
松島 茂

「若い人に贈る読書のすすめ」によせて

ぼくの写真は「人本位」という漆原宏さん。図書館を利用する人の動きや表情、佇まいをカメラで追い、図書館はどこなところかを雄弁に語る写真を撮ったカメラマンです。漆原さんは1970年代後半から2000年代半ばまで、全国の図書館を毎日のように巡って5万点以上におよぶ図書館の写真を撮っています。その一部でも見てもらえば図書館がわかる、という思いで2013年に出版したのが、日本図書館協会として初の写真集となった『ぼくは、図書館がすき』であり、今年出版した『ぼくは、やっぱり図書館がすき』です。第1集は、2000年代以降の図書館をカラーで紹介するものでした。そこには、カ

ラフルな鉛筆を片手に熱心に調べものをする女性や、緑鮮やかな図書館の庭で語りあう青年、ヘッドホンをしながら本を選ぶ男性など、身近になった図書館をおしゃれに使いこなす若い人たちの姿がありました。第2集は、図書館笑顔プロジェクトという出版社やコンピュータ会社の方も参加するチームで選んだ、1980年代を中心としたモノクロームの写真集です。このころの図書館を知らない人が新鮮と感じたモノクロームの写真は、漆原さんがごんごん好きになつていつた暮らしの中の図書館を、説明がいらぬほど鮮明に写し出していました。子どもたちがカメラに気づくと、無防備に「撮って!

撮って!」と、はしゃいで集まってくる明るい子どもたちの笑顔は、まるで自分の遊び場であるかのように図書館を、自由に楽しい場所と感じたからこそのでしょう。しかし、子どもをめぐる事件がたび重なるにつれ、子どもたちが無表情になつてきたと漆原さんはいいます。子どもたちは時代の顔なのです。写真集には、冠婚葬祭の本棚の前で、本を広げて語りあう若いカップル、友だちと床に寝そべって楽しそうに読書している子どもたち、将棋の雑誌をむずかしい顔で読んでる少年など、まさに、居心地のいい「本のある広場」というべき、静かで賑やかな空間が広がっています。本が人に語りかけてくるよ

うに、図書館は人をひとりぼつちにしません。図書館は、どこにも居場所がないと思う若い人も「あ、図書館があった」と思わせる場所だと思えます。学校に行かず図書館にきた子どもが、好きな本と出会って、学校に行く元気を取り戻したということもあるのです。漆原さんは、みんなが幸せに暮らせる理想の実現に図書館が欠かせないと考え「図書館は時空を越えて世界の人々と出会い、資料を媒介に人と人が集会所で集い、明日への知恵と英気を養うところですよ」といつています。また、ある図書館でもらった封筒に「見えないものが見える目」と記されているのを見て、図書館は「物事の本質とその構造」が見えてくる場所なのではないかと思つたといっています。この写真集を開けば、きっと、図書館が人と本とを結び、自ら考えを持ち、人と人がつながる場であることを発見してもらえらると思います。

2018 『若い人に贈る読書のすすめ』実施

10月17日(火)に開催された公益社団法人読書推進運動協議会・事業委員会で、2018「若い人に贈る読書のすすめ」推薦図書24点が選定されました。

今年も例年どおり、道府県読書推進運動協議会に「若い人にぜひ読んでもらいたい本」の推薦を依頼、39の読進協から計90点の書目の推薦をいただきました。

もともと推薦が多かったのは、前野ウルド浩太郎の『バッタを倒しにアフリカへ』で、5つの読進協から推薦がありました。ついで、西原理恵子の『女の子が生きていくときに、覚えていてほしいこと』、辻村深月の『かがみの孤城』に4つの読進協から推薦があり、人気を集めました。

また、今年是将棋ブームということもあり、将棋をテーマにした

書目への推薦も多くありました。事業委員会では、①各出版社1点 ②推薦多数書目の検討 ③そのほか特別に推薦したい書目の順で選考。最終的な確認を得て24点が決定しました。

本年度も、この推薦図書を掲載したリーフレットを21万部製作、都道府県の読進協・県立図書館を通じて各公共図書館に、取次会社を通じて全国の書店に配布を行い、有効に活用していただく予定です。

このキャンペーンの期間は、成人式から、高校生・大学生が新たな世界へと羽ばたく3月末の卒業シーズンとしています。

成人式や卒業式、読書グループ、学校での読書指導、地域の文化活動などでのご利用のために、予備を多少ご用意していますので、ご希望の方は公益社団法人読書推進運動協議会事務局までお問い合わせください。

03-3260-3071
e-mail info@dokusyo.or.jp



「若い人に贈る読書のすすめ」リーフレット掲載書名一覧

著者名	書名	定価	出版社
前野ウルド浩太郎	バッタを倒しにアフリカへ	九四九	光文社
西原理恵子	女の子が生きていくときに、覚えてほしいこと	一一八八	KADOKAWA
辻村 深月	かがみの孤城	一九四四	ポプラ社
住野 よる	か「く」し「こ」こ「と」	七五六	文藝春秋
池上 優彰	僕たちが何者でもなかった頃の話をしよう	一五二二	新潮社
佐藤 泉	僕らが毎日やっている最強の読み方	一五二二	東洋経済新報社
中満 泉	危機の現場に立つ	一六二〇	講談社
了サレビード (編著)	知らなかった、ぼくらの戦争	一六二〇	小学館
国谷 裕子	キャスターという仕事	九〇七	岩波書店
藤原 和博	10年後、君に仕事はあるのか?	一五二二	ダイヤモンド社
竹信三恵子	これを知らずに働けますか?	九〇七	筑摩書房
植松 努	「どうせ無理」と思っている君へ	一二九六	PHP研究所
北山 公路	マルカン大食堂の奇跡	一四〇四	双葉社
齋藤 孝	まねる力	七七八	朝日新聞出版
青羽 悠	星に願いを、そして手を。	一七二八	英社
伊東 潤	走狗	一八三六	中央公論新社
月沢李歌子(訳)	成功する人は偶然を味方にする	一七二八	日本経済新聞出版社
吉野源三郎	君たちはどう生きるか	一四〇四	マガジンハウス
羽生善治・NHKスペシャル取材班	人工知能の核心	八四二	NHK出版
山崎正浩(訳)	イラストで学ぶスタディスキル図鑑	三〇二四	創元社
田中 慎弥	孤独論	一〇八〇	徳間書店
ロート・レフ	ヒーロー 家族の肖像	一六二〇	西村書店
新朗(恵)(訳)	宗教ってなんだろう?	一五二二	平凡社
島菌 進	大人のための社会科学	一六二〇	有斐閣





2017年度・第50回 全国優良読書グループ表彰 ——都道府県読書推進協議会推薦——

公益社団法人 読書推進運動協議会では、第71回「読書週間」事業として、11月3日(祝)を中心に、各道府県の読書推進運動協議会を通じて、「第50回 全国優良読書グループ(下表)」の表彰を行いました。

読書グループの結成促進と育成強化は、読書推進運動の根幹をなすものとして、公益社団法人 読書推進運動協議会は結成以来、活動の第一目標とし、道府県各読書推進運動協議会と連携して、その育成・発展に努力を重ねています。

この事業は、各読書推進運動協議会の推薦により、一地域一グループを表彰するもので、原則として5年以上の活動を続けているグループを推薦・表彰の対象としています。

現在、読書グループの活動は、読書会、実演活動、家庭・地域文庫、障がいを持つ方への読書支援、図書館サポートなど、多岐にわたつ

ています。全国の読書グループに敬意を表し、数ある読書グループを対象にご推薦の労をとられた、各道府県読書推進運動協議会のみなさまに、深く感謝いたします。

推薦された優良読書グループには、その業績を讃え、公益社団法人 読書推進運動協議会より賞状および副賞(図書カード2万円分)を、各道府県読書推進運動協議会を通じて贈呈いたしました。

各グループの活動状況は、1月号以降、本紙上で逐次紹介していきます。

この優良読書グループ表彰は、1968年 第22回「読書週間」から実施しており、本年までの表彰グループ数は1736グループとなります。

なお、副賞の図書カード2万円分のうち1万円分は、例年同様、日本図書普及株式会社との協賛により寄贈されたものです。同社の協力に厚くお礼申し上げます。

日本図書普及社

贈りものに。お礼、お返しに。

東山魁夷シリーズ
1,000円・3,000円・5,000円 10,000円

優良読書グループ名	所在地	代表者(世話人名)
南幌町読み聞かせサークル おはなしサークル「虹色の会」 読み聞かせグループやまびこ 仙台市図書館ブックトークボランティア「ラン」 葦の会 めがみちゃんの会 そとのおはなしの会 朗読グループ いずみ オリブ	北海道空知郡南幌町 青森県上北郡野辺地町 岩手県九戸郡九戸村 宮城県仙台市 秋田県湯上市 山形県最上郡舟形町 茨城県ひたちなか市 栃木県鹿沼市 群馬県邑楽郡邑楽町 埼玉県桶川市 千葉県柏市 新潟県新潟市 富山県高岡市 石川県能美市 福井県三方郡美浜町 山梨県南都留郡忍野村 長野県長野市 岐阜県加茂郡富加町	岡田さおり 上原子明美 伊保内恒子 堀 多佳子 村井 広子 阿部 弘明 永沢ひとみ 阿部 洋子 横塚登代子 長野 幸枝 阿部 千晴 本名 有希 吉田カヨ子 道 勝美 石丸 邦子 一之瀬香代 戸谷 浪子 高垣 浩規

優良読書グループ名	所在地	代表者(世話人名)
水ようおはなし会 志津あゆみ読書会 おはなしのこぼこ ゆかいな図書館 おはなし宅急便キキ 成人読書むつみ会 岡山ストーリーテリング研究会 めだか絵本の会 つるぎ町たまゆら友の会 おはなし紡ぎの会 ほっとブックなかま はすの実読書会 まつうら図書館きらきら塾 由布市立図書館読み聞かせグループ「どんぐりたまごのぼうけんり」とるコアア	静岡県菊川市 滋賀県草津市 京都府相楽郡精華町 和歌山県橋本市 鳥取県鳥取市 島根県松江市 岡山県岡山市 広島県安芸郡熊野町 徳島県美馬郡つるぎ町 香川県高松市 福岡県中間市 福岡県白石町 佐賀県杵島郡白石町 長崎県松浦市 大分県由布市 宮崎県児湯郡高鍋町 鹿児島県鹿児島市 沖縄県島尻郡南大東村	三浦 康子 井上 捷子 播磨富土子 坂口 繁昭 奥谷 仁美 原 正治 筒井 悦子 柿本節子 織田和子 山内 慶子 山内 智子 山中 民恵 橋本 明子 森 三佐子 野田 時枝 黒木さくら 中木場千穂 大城 貴子

(以上35グループ)

「全国図書館大会 東京大会」開催

図書館と本、地域をめぐる課題を
各種分科会で取りあげる

10月12日(木)・13日(金)、東京都渋谷区の国立オリンピック記念青少年総合センターで「第103回全国図書館大会 東京大会(主催)日本図書館協会」が開催された。大会テーマは「まちづくりを図書館から」。



多くの参加者を集めた、分科会「公共図書館の役割と蔵書、出版文化維持のために」

「基調報告」。図書購入費の減少がつづく現状や、指定管理者制度導入増加と共に非正規職員の増加している問題などが報告された。

「図書館で会いましょう」合唱団などによるオープニングアトラクションのあと開会式が行われ、第33回日本図書館協会建築賞の表彰が行われた。受賞者は千葉県の八千代市立中央図書館・八千代市民民ギヤラー。

現在の日本が置かれている、「異次元の高齢化」と「中間層の没落による格差と貧困」の現状を打開するには、「知の再武装」しかなく、その拠点としての図書館の役割は大きいと語った。

分科会は「公共図書館の指定管理者制度」「災害から図書館を守り救うために」「なぜ進まない?! 多文化サービス」「非正規雇用職員の現在」など、合計24が開催された。第21分科会「公共図書館の役割と蔵書、出版文化維持のために」は、報告者の松井清人文藝春秋社長の「文庫は借りずに買ってください」が前日より各種メディアで報道されたこともあり、注目を集めた。松井さんは社内発行物の詳細な数字をあげながら、文芸書系出版社にとって文庫本の



読書推進運動協議会の展示では読書週間グッズも紹介

売り上げが生命線であることを説明。若いときに、自分では買えない高価な本を片っ端から図書館で読んだことが、自身の出版人としての基礎であると述べ、安価な文庫本ではなく、図書館は図書館でなければそろえられない本を利用者に提供してほしい、文庫や新書も図書館で読めるという読者の意識を変えるきっかけとして、図書館での文庫の貸し出しをやめてほしいと訴えた。



ふだんほとんど目にしない国や地域の本も多く紹介された

JBBY 図書内覧会

世界中から集まった
選りすぐりの子ども本を紹介

日本国際児童図書評議会(JBBY)は、10月17日(火)・18日(水)に、東京都新宿区の日本出版クラブ会館で、「JBBY 外国の子どもの本内覧会」を開催した。

この内覧会は、国際児童図書評議会(JBBY)が2年に一度、75の加盟各国・各地域から「外国の子どもたちに読んでもらいたい児童書」を集めて発表する「IBBY オナーリスト」を紹介するもので、今回は2014年オナーリスト169タイトルと2016年オナーリスト150タイトルが展示された。JBBYは、「諸外国が推薦

する児童書を、日本の子どもたちが読めるよう、邦訳出版につなげたい」と開催の趣旨を述べている。会場では、地域・国別に図書が並べられ、それぞれにJBBYが用意した、日本語のタイトルと内容紹介、著者・画家の紹介シートが添付された。また、各国の児童書事情に精通したJBBY理事が会場で説明・質問に応じる時間も設けられた。

この内覧会で展示された図書は、国際アンデルセン賞に関連するパネルなどとあわせて、展示を希望する図書館・美術館などにセットで貸し出しもされる。IBBYのオナーリストのオリジナルカタログ(英文)はIBBYのホームページよりダウンロード可能。また、JBBYより日本語版のカタログ(500円)も入手できる。展示会、日本語版カタログについての詳細は、JBBYまでお問い合わせを。

JBBY

ホームページ <http://jbbj.org>
メールアドレス info@jbbj.org

親地連が2年に1回の全国交流会開催

「今こそ」ことを力に!」がテーマ
全国から会員が参加



ことばと想像力の可能性を語る
落合恵子さん

親子読書地域文庫全国連絡会(親地連)は、10月14日(土)・15日(日)東京都渋谷区の国立オリンピック記念青少年総合センターで「第21回 全国交流会」を開催した。今回のテーマは「今こそ ことを力をに!」。のべ27名が参加した。

基調講演「子どもと本ー平和と自由あつてこそ」は、親地連代表の広瀬恒子さん。「国際的、社会的に厳しい状況で、子どもの本でどのように平和と自由をアピールできるのかが大きな問題」であり、児童文学と大人の文学とのボーダレス化、子どもと本の出会い

の場のひとつでもある町の書店の減少、学校間の読書環境の格差の広がりなど、子どもと子どもの本をめぐる現状が報告された。講演のひとつ目は作家 落合恵子さんの「誰でもかかつては子どもであり、誰でもいつかは高齢者に」。差別意識をそのまま口にできる時代となつていまだが、ほんの少しの想像力を持つことが、なにかを変えられるのかもしれない。ことばというメッセージを投げ続け、メッセージを受け取る。ことが必要」と語った。

親子読書地域文庫全国連絡会
第21回 全国交流会

親子読書地域文庫全国連絡会第21回全国交流会において、私たちは各地から集まった仲間たちと、「今こそ ことを力をに!」のテーマのもと、子どもと本をむすぶさまざまな活動や意見を交流し、学び合いました。子どもたちが置かれている困難な状況についても学びを深め、地域で直面する多種多様な課題への取り組みも知ることができました。それだけでなく、子どもたちよりよい社会のために、いたるところで皆さんの仲間たちが多彩で地道な活動を精力的に繰り返していることにも励まされました。

いま、私たちをとりまく暮らしや社会には、「表現の自由」や「知る権利」がおかされかねない危険な状況があります。私たちが何よりも大切に守りたいと思っている自由で平和な社会は、「表現の自由」や「知る権利」がなければ成り立ちません。だからこそ、子どもと本や読書の自由を大切に守る「ことば」を大きく、力強く伝えていきたいと思えます。そして、一人ひとりの尊厳を守ることのできる平和な社会を、しっかりと次の世代に手渡していきたいでしょう。

一人ひとりの子どもが本と出合い楽しむことができる読書環境をより充実させ、「すべての子どもに読書のようなこびを」保障できますように、次の一歩を歩んでまいります。

第11回「朝の読書大賞」

地域との交流が不可欠の
読書推進活動を評価

10月30日(月)、東京都千代田区のクラブ関東で「高橋松之助記念『朝の読書大賞』『文字・活字文化推進大賞』贈呈式(主催 高橋松之助記念顕彰財団)」が行われた。

今年の受賞者は以下のとおり。

【第11回 朝の読書大賞】

- ・霧島市立青葉小学校
(鹿児島県霧島市)

「朝の読書」は始業前に10分間、毎日行われている。月曜日と木曜日には「読書タイム」を校時表に設定し、読書・読み聞かせを実施している。



今年の受賞者のみなさん

- ・白山市立松任中学校
(石川県白山市)

毎日15分間の「朝の読書」が本格的にはじまったのは2010年より。「親から子へ 中学生のみんなに読んでほしいこの一冊」は冊子にして全家庭に配布している。

- ・千葉県立八千代西高等学校
(千葉県八千代市)

「朝の読書」への取り組みは今年で17年目。「八千代西高の先生おすすすめ本五十冊」は冊子にして発刊。老人ホームや特別支援学校での「読書交流会」など地域活動にも広がりをみせている。

【第11回 文字・活字文化推進大賞】

・青森県八戸市「本のまち八戸」
赤ちゃんへ絵本を贈る「ブックスタート事業」、3歳児を持つ保護者への「読み聞かせキッズブック事業」、全市内小学生が、保護者と書店で本を選んで購入体験する「マイブック推進事業」。提案型・編集型陳列の閲覧・販売・イベント公営スペース「八戸ブックセンター」などの事業で市内の書店・図書館・市民活動と連携している。

■2018年いわさきちひろ生誕100年

いのち、子どもたちへのまなざし… ちひろの思いをいまこそ！

11月1日(水)、いわさきちひろ美術館(東京・安曇野)は、2018年のいわさきちひろ生誕100年を記念して開催する展覧会、特別展などの概要を発表した。

11月3日(金)～5日(日)、東京都千代田区の神保町「すずらん通り」などで、「第27回 神保町ブックフェスティバル(主催) 同実行委員会」が開催された。

3月より東京と安曇野の美術館で行われる展覧会のテーマは「Life」。いのち、生命の力、人生、活気、生きがいなど、ちひろが大切に思い描いてきたものを、次の世代に伝えていく。「Life展」は、造形、空間、写真、ファッション、建築、詩など各分野の7人のアーティストがそれぞれ、ちひろに触発された作品とちひろの絵で構成され、各展は、大巻伸嗣「花のように生きる(仮)」Plapla「あそび」石内都「ひろし」spoken words project「着るをたのしむ」トラフ建築設計事務所「子どものへや」谷川俊太郎「みんない

きてる」長島有里枝「作家で、母でつくるそだてる(仮)」すべての「Life展」に入館できるパスポートも用意される(1000円)。

書店が立ち並ぶすずらん通りには、各出版社が謝恩価格本やサイン本などをワゴンで販売する「本の得々市」が開かれ、掘り出しものを求める読者で大いにぎわった。すずらん通り入口では、明治大学応援団吹奏楽部とバトン・チアリーディング部のパレードや、近隣小中学校の和太鼓や吹奏楽演奏、ジャズバンドの演奏などもあ

り、フェスティバルを盛りあげた。フェスティバルでは、古文書講座、トークイベント「国語事典ができるまで」、声優の小原乃梨子さんの朗読研究会、大学生によるピブリオバトル、「第11回 神保町寄席」などのイベントも数多く開かれた。

た。東京堂ホールが会場の「第51回 造本装幀コンクール公開展示」では、各賞受賞作だけでなく、応募作品約330点と、同コンクールの歴史が紹介された。専修大学キャンパスでの「本の学校 出版産業シンポジウム2017 in 東京」神保町で本の「いま」を語る「Life」では、基調フォーラムに続き、ZOOMメディア、ブックイベントなどをテーマにした5つの分科会が行われた。



Chihiro nosei 100nen
長嶋りかこさんデザインの「Life展」案内

【いわさきちひろ生誕100年サイト】
<https://100.chihiro.jp>

■毎年恒例！神保町ブックフェスティバル

今年は3日間開催！ 通りを本と読者が埋めつくす

「子どもの本のひろば」のおはなし会には、着ぐるみの登場も

協賛イベントも各種開催され

紙の本ならではの印刷・製本技術を味わえる造本装幀コンクール展示



入手にくい本も多く並ぶ「本の得々市」



「子どもの本のひろば」のおはなし会には、着ぐるみの登場も



紙の本ならではの印刷・製本技術を味わえる造本装幀コンクール展示



すずらん通り入口の様子

■信濃毎日新聞と岩波書店が「文庫カバ―絵コンテスト」

活字をもっと身近なものへ

信濃毎日新聞 東京支社営業部

延本 琉伊

若者・子どもにも活字文化を

長野県諏訪市は岩波書店の創業者である岩波茂雄の出身地です。こうした縁もあり、信濃毎日新聞と岩波書店はさまざまな面で深い関わりを持ってきました。近年では、著名な文化人らを招いての連続講演会「信州岩波講座」を毎年開催しており、今年で19回を数えました。

ただ、営業担当者の間では、講演会とは別に「なにかいっしょに企画ができないか」という思いを長年抱いてきました。それが、岩波文庫創刊90年の今年結実することになりました。

新聞社と出版社——ともに言論と活字文化を担い、発展してきた業態ですが、近年は「新聞離れ」「本離れ」に悩まされています。とくにインターネットの発達やスマートフォンとの普及に伴い、子どもや若い世代の活字離れは深刻の度を増しています。

なので、岩波文庫創刊90年を好

機に、子どもや若い世代をターゲットにした企画を考えていくことにしました。ただ「もつと本や新聞を読みましよう」と大上段に構えるのではなく、「活字をもっと身近なものにしたい」という思いで、若い人たちが抱えているであろう、活字に対する苦手意識や取っ付きにくさを少しでも解消できたら——と、さまざまなアイデアを出しあい、検討を重ねました。

思いあふれる絵がつぎつぎと！

そうして立ち上げたのが、岩波文庫創刊90年記念「岩波文庫カバ―絵コンテスト」です。長野県内在住の小学生から大学生・専門学校生を対象に、9冊の課題図書それぞれに対し、若者が読んでみたくなる、手に取ってみたくなるような岩波文庫のカバ―絵（表紙）を描いてもらい、優れた作品は実際に文庫に装丁し県内の協力書店で販売する——という企画です。こどもの読書週間がはじま

る4月23日から募集を開始。朝刊でのお知らせ広告のほか、ポスターやチラシを県内の図書館や書店へ配布したり、ホームページやSNSを通じて7月26日まで作品を募りました。

すると、県内各地から330点もの力作が集まりました。小学生のほのぼのとした絵から美術専門学校生の本格的な作品まで、多種多様でありながら、応募者の思いが伝わってくるものばかりでした。作品に添えられた「PR文」を読むと、応募者一人ひとりが、課題の



思いあふれる応募作をていねいに審査する小松美羽さん



自分の絵が印刷され、本になる瞬間に立ち会う受賞者たち

文庫本を読み、感じたことや人に紹介したいと思ったことを工夫して描いていたことがわかりました。

8月上旬、長野県出身の現代アーティスト・小松美羽さんの特別審査員に招き審査会を実施。熱い議論の末、各課題図書につき1点ずつを受賞作品として選びました。

受賞作品を装丁した文庫本の県内書店での販売を、読書週間がはじまる10月27日に設定しました。それに先立ち、コンテストに特別協力をいただいた大日本法令印刷（長野市）で、受賞者とその家族を招いて製本過程の見学会を開催しました。自分が描いたカバ―絵が印刷され、文庫本になつていく様子を目の当たりにした受賞者た

ちは「自分の絵が本になるなんて夢みたい」「貴重な体験ができて、小説がもつと好きになった」と目を輝かせていました。

受賞したカバ―絵が店頭に

10月27日、県内47書店でフェアがはじまりました。店頭にて特設コーナーを設けて、表紙の絵柄が目を引きように文庫本を並べるなど、各店舗とも「若者が名譽を手にするきっかけになれば」と展示に工夫を凝らしています。来店した人々も、親しみやすいカバ―絵にコーナーの前で足を止め、1点1点じっくり見たり、文庫を手にとったり——と関心を寄せているそうです。

今回、地方紙と出版社が手を組み、県内の印刷会社や書店の協力があったからこそ「活字をもっと身近なものへ」という企画が実現しました。こうした試みからひとりでも多くの方が活字を身近に感じてくれるよう、もつと知恵を絞っていききたいと思っています。



岡谷市の笠原書店店頭特設コーナー

■第49回出版功労者顕彰会

版元、書店関係者より
出版に長く貢献した功労者を顕彰

10月6日(金)正午より、箱根芦ノ湖畔の出版平和堂に、出版関係者約100人が集い、「出版平和堂第49回出版功労者顕彰会」が行われた。

式は野間省伸 日本出版クラブ会長が挨拶。冒頭、7月に福岡県、大分県を中心とした九州北部を襲った豪雨の被害地域へのお見舞と、いまだ復興半ばの東日本大震災と熊本地震への「出版と読書

を通じて支援の継続の決意を確認した。

昨年来のお堂の改修工事につき、進入路の整備舗装と遊歩道の新設工事の予定も披露された。

鹿谷史明 日本雑誌協会理事長が11名の新顕彰者の奉告を行い、船坂良雄 日本書店商業組合連合会会長による献詞奉読のあと、参加者全員で献花が行われた。相賀昌宏 日本書籍出版協会理事長の



改修された平和堂と参加者のみなさん

感謝のこぼれに続き、新顕彰者、家族と役員で記念撮影、そして会場を箱根ホテルに移し、平林彰 日本出版取次協会会長による献杯で、懇親会が行われた。

■「読書週間」恒例のキャンペーン

のべ参加者数15万人も間近
「おはなしマラソン」

日本出版販売株式会社は、今年も「読書週間」にあわせ、全国147の書店で「おはなしマラソン」読み聞かせキャンペーンを展開した。

1999年よりスタートした、書店店頭での読み聞かせ会「おはなしマラソン」は年間を通じて全国の各書店で行われているが、「読書週間」のこの時期は通常よりも多くの書店が開催される。

参加した保護者からは「子ども

が選んでいない本を読んでもらえて、読書の幅が広がる」など、好評を博している。

日本出版販売では、「おはなしマラソン」ホームページで開催日と開催書店の告知をし、また、参加書店へ告知ポスターなどを提供している。開催時には年齢別絵本ガイドブック「いくつのえほん」や、子どもたちへのおみやげ(折り紙など)が参加者にプレゼント

される。

される。

このキャンペーンは秋の「読書週間」だけでなく、春の「こどもの読書週間」時にも、展開されていて、今回が33回目となる。また、「おはなしマラソン」は2017年8月までに、全国192書店で開催され、参加者数はのべ14万9千人以上に上っている。ホームページには、開催書店の情報や、おすすめの絵本コーナーなども掲載されている。

●「おはなしマラソン」ホームページ

http://www.nippan.co.jp/ohanashi_marathon

事務局報告(10月)

●編集部&事務局のひとこと

ひ・と・こ・と

- ☆3日 第71回読書週間事業について 図書普及と打ちあわせ
- ☆4日 機関紙「読書推進運動」別冊付録「2017 こどもの読書週間」行事報告一覧 データ入稿
- ☆5日 「上野の森親子ブックフェスタ」運営委員会 出席
- ☆6日 伊藤忠記念財団子ども文庫助成事業 書類と評価を提出
- ☆6日 機関紙「読書推進運動」(50号) データ入稿
- ☆6日 「第49回出版平和堂・出版功労者顕彰会」に出席
- ☆8日 第60回「こどもの読書週間」ポスターイラストについて荒井良二さんと打ちあわせ
- ☆10日 野間読書推進賞贈呈式招待状 発送
- ☆12・13日 「第103回 全国図書館大会 東京大会」参加
- ☆14・15日 親子読書地域文庫全国連絡会全国交流会 参加
- ☆17日 「若い人に贈る読書のすすめ書目選定事業委員会」開催
- ☆19日 野間読書推進賞贈呈式要項 入稿
- ☆19日 第51回 造本装幀コンクール授賞式 出席
- ☆20日 第60回「こどもの読書週間」ポスターデザインについて 杉浦康平事務所と打ちあわせ
- ☆24日 野間読書推進賞贈呈式について 文部科学省生涯学習政策局に祝辞依頼 打ちあわせ
- ☆25日 「平成29年度 第3回 常務理事会」開催。7月から9月の財務報告 および事業報告
- ☆26日 読書推進委員会 出席
- ☆27日 11月9日「2017年 第71回「読書週間」
- ☆30日 「朝の読書大賞」「文字・活字文化推進大賞」贈呈式に出席
- ☆31日 絵本文化推進協会運営委員会に出席

「2018 若い人に贈る読書のすすめ」で、圧倒的な推薦数を集めた「バッタ」を倒しにアフリカへ(光文社)。モータリニアでサブクトビバッタの大量発生問題に取り組む昆虫学者 前野ウルド浩太郎さんの記録です。この本は、バッタの生態、バッタ研究の最新線を紹介するだけでなく、前野さんが昆虫学者として生きていくために、いかに学術機関その他に働きかけ、研究費を得てきたかの奮闘記でもあります。

●親子読書地域文庫全国連絡会交流全国集会では、池内さん、大学の競争化、法人化などに加え、「研究費不足に追い込み、大学と科学をコントロールしよう」というと、近年予算がつけられた軍事的安全保障研究の背景を紹介されました。

●開催前より話題となった、全国図書館大会分科会での文藝春秋 松井社長「図書館で文庫は買わないでください」発言。本文でも紹介しましたが、私は図書館への注文ではなく、せめて、読みたいと思う文庫や新書は借りるのではなく、自分で買ってほしいという、読者へのお願ひと思いました。

●経済効率を優先させ、知ること、学ぶことを楽しむこと文化に適切なお金をかけようとならない、社会と個人のあり方が、いま、問われているのではないのでしょうか。個人、自治体、図書館、各機関、そして個人、お財布の中身はかぎりがありますが、ちよつとだけでも、文化の優先度をあげてほしい「文化の日」と「読書週間」です。(伸)